四国大学紀要，(A) 40：1－12，2013
Bull. Shikoku Univ. (A) 40：1－12，2013

A県における子育て支援ニーズに関する調査研究（その１）
―― 子育ての悩みやストレス解消法の地域比較 ――

中岡泰子・小川佳代・富田喜代子・前田宏治・加藤孝士・
高橋順子・石原留美・尾崎八代・中澤京子・三木章代・
吉村尚美・江口実希・富田真佐子

A Study on the Needs for Supporting Child Rearing in A Prefecture (Part 1): Locality Comparison of Child–Rearing Anxiety and Coping with Stress

Yasuko Nakaoka, Kayo Ogawa, Kiyoko Tomida, Koji Maeda, Takashi Kato,
Junko Takahashi, Rumi Ishihara, Yayo Ozaki, Kyoko Nakazawa,
Fumiyo Miki, Naomi Yoshimura, Miki Eguchi and Masako Tomita

ABSTRACT

The purpose of this paper was to clarify how to aid childcare in A Prefecture. In order to achieve this purpose, data were collected from 477 parents and family rearing infants. The major findings can be summarized as follows:

1) Many of the child–rearing anxieties involved children's health and development.
2) Parents' methods of coping with stress were to speak to their spouse, parents, and friends. There were regional differences in their associations with friends.
3) There were many people who desired a place where parents and their children could enjoy themselves lightheartedly.

Keywords: childcare support, child–rearing anxiety, coping with stress

Ⅰ．研究動機と目的

政府は，1989年の1.57ショック以降の1990年代から，少子化を社会問題として議論し，様々な子育て支援策に取り組んできた。しかし，少子化はさらに進行し，深刻な状況にある。また，核家族化の進行にともなって，祖父母世代からの経験的な育児支援も減少し，家族における育児機能が低下している。子どもの世話をした経験がないまま親となる母親も増えている。多くの母親は相談する相手も乏しく，育児の孤立化が進み，育児不安から児童虐待につながるケースもあり社会問題となっている（井上他，2011）。

子育て不安を抱える母親の支援については，子育て中の親のストレス状況の把握やその支援方法についての検討が進められている（小川他，2010；加藤，；2012齋藤他，2011）。そして，最近では，それらを踏まえた子育て支援策として，企業・行政・NPO等が一体となって子育て家族を支援しようとするプラットフォーム作りが進んでいる。

そのような中，本学でも，新たな子育て支援システムの構築を目指して共同プロジェクトを立ち上げ，大学が地域の子育て支援の拠点の一つとしてどのような取り組みができるのかを検証することとした。今回の共同研究者の専門は，保育学，小児看護学，地域看護学，助産学，生活科学，家族看護学，社会学で，異なった専門職者が協働して，より多角的な子育て支援に取り組めるものと考えている。

大学の専門職者として，子どもと家族への支援を具体的に実践するためには，まず，本学が位置する地域における子育て環境を把握し，潜在的な子育てニーズや，子育て支援のための課題を明らかにすることが必要である。

本研究では，支援の対象者である子育て中の親及

びその家族を対象に，子育てニーズを把握するために実施した調査結果を報告する。

Ⅱ．方　法

1．調査の手続き

平成24年11月～平成25年１月にＡ県内17か所の地域子育て支援センターに通っている子どもの親及び家族630名を対象に調査を実施した。地域子育て支援センターは，子育ての不安や悩みについての相談，育児講座の開催，育児サークルの育成・支援，保護者同士の交流の場の提供などを行っている場である。調査を依頼した地域子育て支援センターの選定については，Ａ県を５つのブロックに分け，地域による比較分析が出来るように配慮し，各ブロック100ケースの回収を目指して調整した。

調査票の配布・回収については，地域子育て支援センターの職員の協力を得て，調査票を利用者に配布してもらい，留め置き法により，各施設に設置した回収箱に投函してもらった。その結果，477名の協力が得られた（有効回答率75.7%）。

各地域の調査対象に選定した地域子育て支援センターの内訳は，表１に示す通りであり，回収したデータ477名を分析対象とした。

表１．地域別にみた調査対象者の内訳

地域分類	調査を実施した地域子育て支援センター	地域別の度数・%
東部	４カ所	108人 (22.6%)
北部	３カ所	81人 (17.0%)
南部	４カ所	112人 (23.5%)
中部	２カ所	102人 (21.4%)
西部	４カ所	74人 (15.5%)
合計	17カ所	477人

なお，Ａ県東部は，県庁所在地を含む市を中心に人口が集中している地域であり，平成23年１月１日現在で総人口の38.1%が住んでいる地域である。本学もこの地域に位置している。次いで人口が多いのが北部であり，総人口の20.2%を占めている。北部は，県庁所在地の北側に位置するベットタウンで，大型ショッピングモールもあり，生活環境が便利で，若者の世帯割合，出生率も高く，ここ数年人口が増えている町も含まれている。本学もこの地域に隣接しており，学術交流に関する様々な協定を結んでいる。

なお，南部・中部・西部は県庁所在地や本学から離れており，急激な過疎化が進んでいる町村を含んでいる地域である。

2．調査対象の属性

表２は調査対象者の性別であるが，女性が98.1%を占め，大多数であった。

表２．調査対象者の性別

	男性	女性
東部	0 (0.0%)	108 (100.0%)
北部	3 (3.7%)	78 (96.3%)
南部	1 (0.9%)	110 (99.1%)
中部	2 (2.0%)	97 (98.0%)
西部	3 (4.1%)	71 (95.9%)
合計	9 (1.9%)	464 (98.1%)

（上段；度数　下段；%）

表３は職業を示しているが，無職がいずれの地域も最も多く，全体の56.7%を占めている。中でも，東部は76.9%が無職で最も高い値であった。これは，本調査の対象者が地域子育て支援センターを利用している親が中心であったことが影響しているものと考えられる。次いで，多いのが育児休暇中であり，全体の14.9%であった。地域別では，西部にお

いて育児休暇中の者が5.4％とやや少なく，フルタイム21.6％，パートタイム20.3％と他の地域に比べて多い特徴がみられる。調査対象者の職業の中には男性も含まれているが，男性のみの内訳をみると，フルタイム６人（66.7％），パートタイム１人（11.1％），自営業１人（11.1％），育児休暇中１人（11.1％）となっている。調査対象者の中で，育児休暇中の男性は１名であるが，この配偶者の職業はフルタイムで働いている。

表４は，配偶者の職業を示したものであるが，フルタイムが全体の82.9％で最も多く大多数を占めている。次いで多いのが，自営業が11.2％であった。女性のみの内訳をみると，フルタイム７人(77.8％)，無職人（11.1％），育児休暇中１人（11.1％）となっている。

表３．調査対象者の職業

	無職	フルタイム	パートタイム	自営業	育児休業中	その他
東部	83 (76.9%)	5 (4.6%)	3 (2.8%)	1 (0.9%)	14 (13.0%)	2 (1.9%)
北部	42 (51.9%)	19 (23.5%)	4 (4.9%)	2 (2.5%)	14 (17.3%)	0 (0.0%)
南部	63 (56.8%)	14 (12.6%)	11 (9.9%)	5 (4.5%)	18 (16.2%)	0 (0.0%)
中部	53 (52.0%)	9 (8.8%)	9 (8.8%)	10 (9.8%)	21 (20.6%)	0 (0.0%)
西部	29 (39.2%)	16 (21.6%)	15 (20.3%)	7 (9.5%)	4 (5.4%)	3 (4.1%)
合計	270 (56.7%)	63 (13.2%)	42 (8.8%)	25 (5.3%)	71 (14.9%)	5 (1.1%)

（上段；度数　下段；％）

表４．配偶者の職業

	無職	フルタイム	パートタイム	自営業	育児休業中	その他
東部	1 (1.0%)	83 (79.8%)	0 (0.0%)	13 (12.5%)	0 (0.0%)	7 (6.7%)
北部	0 (0.0%)	70 (87.5%)	0 (0.0%)	8 (10.0%)	0 (0.0%)	2 (2.5%)
南部	4 (3.8%)	89 (84.0%)	0 (0.0%)	8 (7.5%)	0 (0.0%)	5 (4.7%)
中部	5 (5.2%)	75 (78.1%)	0 (0.0%)	13 (13.5%)	1 (1.0%)	2 (2.1%)
西部	0 (0.0%)	61 (87.1%)	0 (0.0%)	9 (12.9%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	10 (2.2%)	378 (82.9%)	0 (0.0%)	51 (11.2%)	1 (0.2%)	16 (3.5%)

（上段；度数　下段；％）

表５は，子ども数の実態であるが，全体としては，子ども１人が最も多く48.8％を占めている。次いで多いのが子ども２人で38.1％であった。だたし，西部については，子ども２人が最も多く，49.3％を占めている。

表５．子ども数

	1人	2人	3人	4人	5人
東部	62 (57.4%)	39 (36.1%)	6 (5.6%)	1 (0.9%)	0 (0.0%)
北部	41 (50.6%)	27 (33.3%)	13 (16.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
南部	53 (47.7%)	43 (38.7%)	12 (10.8%)	2 (1.8%)	1 (0.9%)
中部	49 (49.0%)	35 (35.0%)	12 (12.0%)	4 (4.0%)	0 (0.0%)
西部	26 (35.6%)	36 (49.3%)	10 (13.7%)	1 (1.4%)	0 (0.0%)
合計	231 (48.8%)	180 (38.1%)	53 (11.2%)	8 (1.7%)	1 (0.2%)

（上段；度数　下段；％）

表６は，家族構成を示したものであるが，全体の73.0％が核家族で最も多く，次いで３世代世帯で20.8％であった。３世代同居は，中部が36.3％と他の地域に比べて多い。

さらに，表７は，家族との同居の実態を示したものであるが，親との同居については，義理の父母とはそれぞれ１割強の者が同居しており，実の父母についてはやや少なく８％前後であった。なお，配偶者と同居している者は，全体としては92.0％である。

表６．家族構成

	核家族世帯	単親世帯	3世代世帯	単親＋祖父母世帯	単親+その他の親族	核家族＋その他の親族
東部	83 (76.9%)	1 (0.9%)	16 (14.8%)	8 (7.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
北部	65 (80.2%)	2 (2.5%)	11 (13.6%)	3 (3.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
南部	89 (79.5%)	2 (1.8%)	20 (17.9%)	1 (0.9%)	0 (0.0%)	1 (0.9%)
中部	57 (55.9%)	6 (5.9%)	37 (36.3%)	1 (1.0%)	1 (1.0%)	0 (0.0%)
西部	50 (67.6%)	4 (5.4%)	17 (23.0%)	3 (4.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
合計	348 (73.0%)	13 (2.7%)	99 (20.8%)	17 (3.6%)	1 (0.2%)	1 (0.2%)

（上段；度数　下段；％）

表７．同居家族員

	配偶者	義父	義母	実父	実母
東部	98 (90.7%)	6 (5.6%)	9 (8.3%)	11 (10.2%)	12 (11.1%)
北部	74 (91.4%)	5 (6.2%)	8 (9.9%)	4 (4.9%)	5 (6.2%)
南部	107 (95.5%)	11 (9.8%)	15 (13.4%)	5 (4.5%)	6 (5.4%)
中部	93 (91.2%)	24 (23.5%)	26 (25.5%)	10 (9.8%)	10 (9.8%)
西部	67 (90.5%)	15 (20.3%)	15 (20.3%)	5 (6.8%)	7 (9.5%)
合計	439 (92.0%)	61 (12.8%)	73 (15.3%)	35 (7.3%)	40 (8.4%)

（上段；度数　下段；％）

３．調査の内容

調査内容は，対象者の属性及び子育て支援ニーズに関連する「育児ストレス」「ストレス解消法」「リフレッシュ効果」「育児サポートのニーズ」「子育ての悩み」「SNS について」の６項目で構成した内容を独自に作成し，学内倫理審査委員会の承認を得た後，実施した。また，調査の実施にあたっては，調査を依頼した地域子育て支援センターの施設長に調査の目的と方法，内容を説明し，承諾を得た後に施設に持参して対象者に配布した。

本報告では，「子育ての悩み」「ストレス解消法」「リフレッシュ効果」「育児サポートのニーズ」の実態について報告する。

まず，「子育ての悩み」に関する項目については，子どもの発達や健康，虐待，仕事との両立など６項目を設定し，「いつも悩む」から「全く悩まない」の４段階評定で回答してもらった。

「ストレス解消法」に関する項目については，育児におけるリフレッシュ（気分転換）を何によって図っているのかを知るための23項目を設定し，「とてもする」から「全くしない」の４段階評定で回答してもらった。「リフレッシュ効果」についても同じ23項目を用い，それぞれの項目について育児におけるリフレッシュ（気分転換）としてどれくらい効果があるのか「とても思う」から「全くない」の４段階で評価してもらった。

「育児サポートのニーズ」については，今後どのようなサポートが必要と思うのか12項目について「とても必要」から「全く必要でない」の４段階で評価してもらった。

Ⅲ．結果及び考察

１．子育ての悩みの実態

図１は，日頃の子育てについて悩んでいることを尋ねた結果であるが，「いつも悩む」「ときどき悩む」及び「まれに悩む」を合計した割合が高い順に示している。最も悩みとして多かった項目は，病気・発育・障害など「子どもの健康や発達のこと」であり，全体の87.1％の人が悩むと回答した。次いで，多かったのが，「夫婦で楽しむ時間がない」61.7％，「子どもが病気がちである」44.5％，「仕事との両立が難しいこと」37.4％と続いている。深刻な問題となっている児童虐待の意識については，全体としては少ないが，「虐待しているのではと思うことがある」と「いつも悩む」者は1.5％，「時々悩む」者は7.2％と，１割弱の者が日頃の悩みとしてあげていることは注目する必要がある。また，「お子さんをかわいく思えないこと」についても，「いつも悩む」者は0.6％，「時々悩む」者は3.0％と少ないが，見過ごせない。

なお，子育ての悩み６項目について地域比較した結果，いずれの項目においても有意な差は認められなかった。

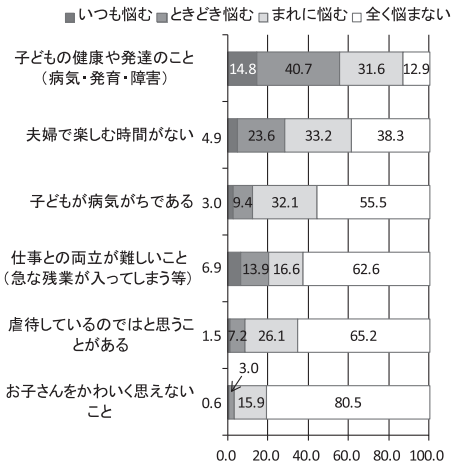

図１．子育ての悩み

また，子育てで悩んでいることを自由に記述してもらったところ，107人（22.4％）から回答を得た。まず，多かった意見は，子どもの病気や発育，障害など子どもの発達に関する悩みであり，中には，健診で不安になることを言われて悩んでいる人もおり，発達障害について尋ねられる身近な相談機関が欲しいという意見があった。

また，初めての子どもにどう接したらいいのか悩んでいる人や，現在の子育てのやり方で大丈夫なのか自信が持てないでいる人，子どものほめ方や叱り方，自主性をどう育てていったらよいのか，また，きょうだいとのかかわり方や反抗期の対処の仕方など，具体的な子育ての方法が分からず悩んでいる人が多い。そして，秘密厳守であれば相談してみたいと思いつつも，自分のことを全く知らない人に相談できず，一人で悩みを抱え込んでしまう人もいるようだ。

また，子育てのストレスから，子どもにあたってしまい自己嫌悪に陥ったり，子どもはかわいいが，一緒だとできないことがあり，つい邪魔に感じてしまうことがある人，忙しさからイライラすることが多いがその対処方法が分からない人など，多くの親が悩みながら子育てをしている実情が伺えた。中には，子どもをどのように可愛がったらいいのか分からないと訴える人もいた。

さらに，家族関係の問題として，夫の仕事が忙しく子育てに非協力的であることや，夫婦のコミュニケーションが不足していること，同居家族からの子育ての干渉があり，昔の子育ての違いで悩んでいる親もいる。

子育てに追われて家事との両立が難しく，ストレスを抱えている人も多い。また，働きたくても保育所に入れない人，経済的な問題を抱えている人，子どもを産みたいが仕事もしたいという葛藤で悩んでいる人など，子育てと仕事との両立の問題も深刻であることが，自由記述から読み取れる。

２．ストレス解消法の実態について

次に，様々な悩みを抱える親たちがどのようにしてストレスを解消しているのかその実態について尋ねた。

図２は，普段のリフレッシュ（気分転換）の実態について，「とてもする」と「少しする」を合わせた割合の高い順に示した結果である。割合が最も高かったのが，「配偶者との会話」で91.1％を示し，次いで，「食べる」84.6％，「親との直接の交流」82.4％，「家事（料理・掃除など）」82.1％，「友人とのメール」80.6％，「買い物」78.9％の順に多かった。親との関係については「直接の交流」によって，友人との関係においては「メール」というツールを使って，リフレッシュ（気分転換）をしていることが分かった。いずれにしても，配偶者や親，友人とのかかわりの中でストレスを解消している人が多いことが分かる。

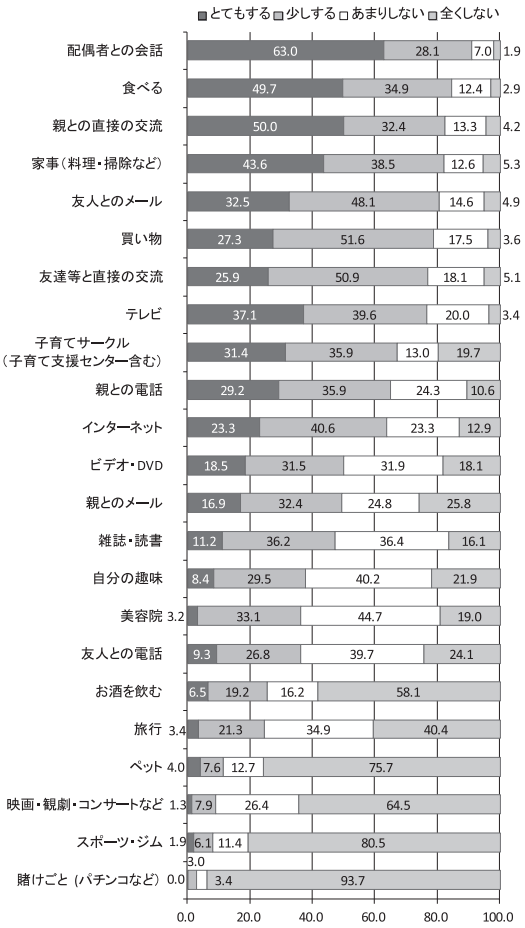

図２．ストレス解消法

子育て支援センター含む「子育てサークル」が気分転換になっている人も，67.3％と高い値を示した。これは，本調査の対象者が地域の子育て支援センターに通っている人を対象にしたことが影響しているものと推測される。

一方，「賭けごと（パチンコなど）」「スポーツ・ジム」「映画・観劇・コンサート」「旅行」など，子どもを預けて外に出かけないといけないものや，時間的ゆとりを必要とする気分転換は出来ていないことが分かる。その代わりに，「家事（料理・掃除など）」や「テレビ」「インターネット」「ビデオ・DVD」といった家の中でできる方法が多くなっている。

次に，ストレス解消に関する23項目について，５つの地域で比較したところ，図３～図６に示す４項目において，地域差が認められた。

まず，図３は，「友達等と直接の交流」について地域比較を示したもので，χ^2検定の結果，１％水準で有意差が認められた。友達等との直接の交流で気分転換している者は，中部が85.3％で最も多く，最も少なかったのが北部で69.1％と，中部とは16.2％の開きが見られた。

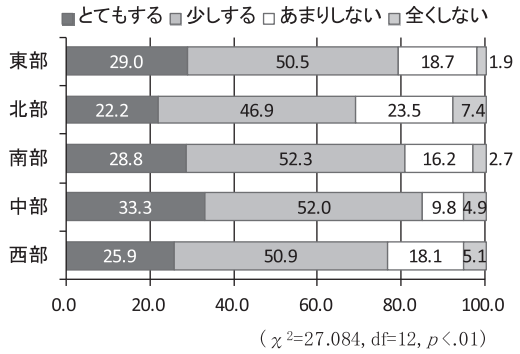

図３．ストレス解消法；「友達等と直接の交流」の地域比較

次の図４は，「友人との電話」について地域比較したものである。「友達等と直接の交流」と同様に，中部が48.0％で最も多く，北部は32.1％となっている。「友人との電話」でストレス解消する地域が最も少なかったのは東部で23.1％であり，北部と比べると約25％の開きが見られ，χ^2検定の結果，１％水準で有意差が認められた。

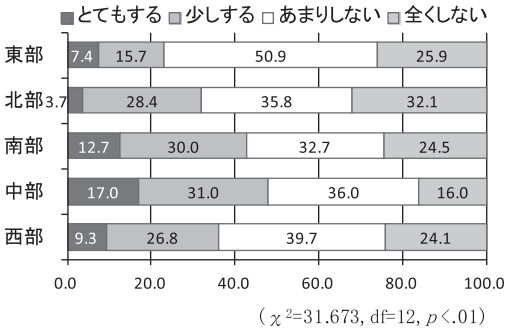

図４．ストレス解消法；「友人との電話」の地域比較

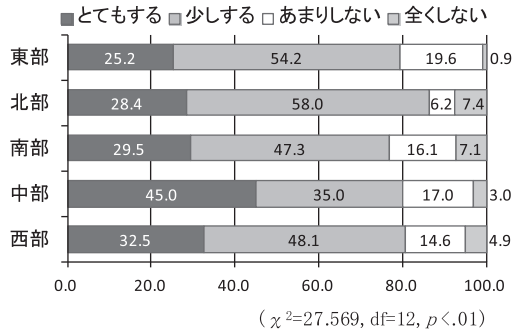

図５．ストレス解消法；「友人との電メール」の地域比較

準で有意差が認められた。

図５は「友人との電メール」について地域比較したものである。「とてもする」と回答した割合は，中部が45.0％と最も多く，χ^2検定の結果，１％水準で有意差が認められた。「とてもする」と回答した割合は，「友達等と直接の交流」や「友人との電話」においても，中部が最も割合が高かったことから，中部の人は友人との交流を積極的に行っている者が多いと言えよう。

以上のことから，友人との付き合いの程度や手段において地域差がみられることが分かった。

図６は，子育て支援センター含む「子育てサークル」について地域比較したものである。県庁所在地を含む市を中心とする東部が最もストレス解消の場になっていることが分かった。「とてもする」と「少しする」を併せた割合は88.8％を占めている。一方，最も割合が低かった地域は，北部で51.9％であり，

東部とは36.9%もの開きがみられ，χ^2検定の結果，１%水準で有意差が認められた。この要因の一つとしては，調査を実施した地域子育てセンターのインタビュー調査において，この地域は転勤族が多いという情報を得ており，このことが影響しているのではないかと推測されるが，今後さらに詳しく分析していく必要がある。

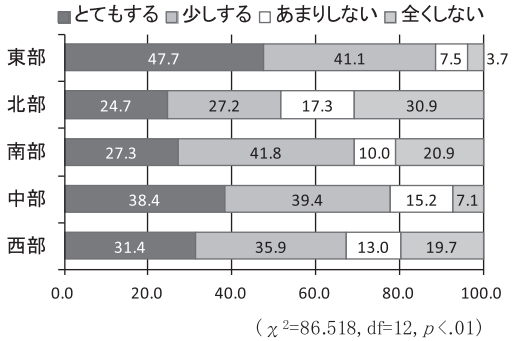

図６．ストレス解消法；子育てサークル（子育て支援センター含む）の地域比較

３．リフレッシュ効果について

図７は，育児におけるリフレッシュ（気分転換）の効果を尋ねたもので，「とてもある」と「少しある」を合わせた割合の高い順に示した結果である。

割合が最も高かったのが，実際のストレス解消法で最も多かった「配偶者との会話」で90.4%を示した。次いで多かったのは，「友達等と直接の交流」で90.0%，「買い物」89.1%，「食べる」88.4%，「親との直接の交流」88.1%，「友人とのメール」85.3%，「子育てサークル（子育て支援センター含む）」78.4%，「親との電話」79.6%と続く。このことからも，子育ての不安や悩みについて相談したり，日々の親同士の交流が，育児によるストレスを解消するのに最も効果があると考えている人が大勢を占めていることが分かる。

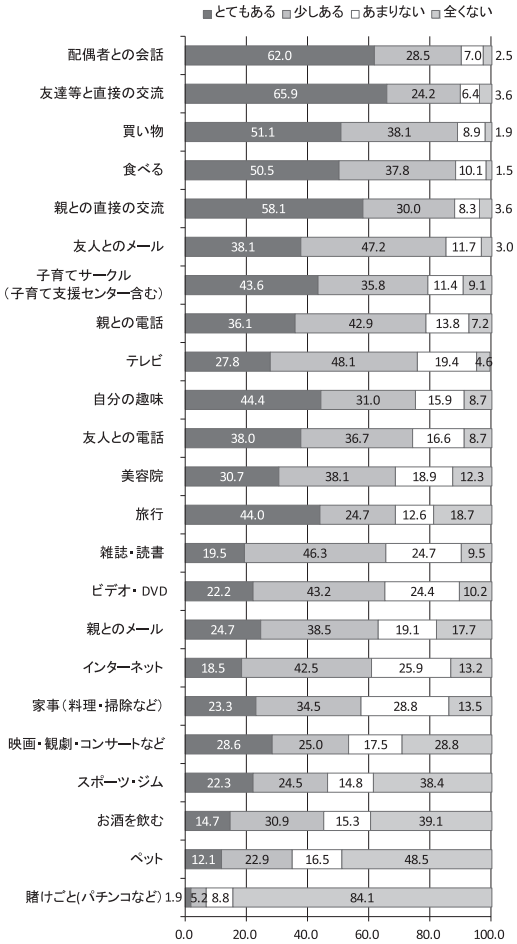

図７．リフレッシュ効果

次に，リフレッシュ効果に関する23項目について，５つの地域で比較したところ，図８～図10に示す３項目において，地域差が認められた。

図８は，「友人との電話」について地域比較したものである。中部が85.1%で最も多く，東部が69.4%と最も低くなっている。東部は，友人との電話にリフレッシュ効果が「全くない」と回答した者が12.0%と，他の地域と比較してやや多い特徴がみられ，χ^2検定の結果，５%水準で有意差が認められた。

図９は，「雑誌・読書」について地域比較したものである。「友人との電話」とは逆に，東部が72.2%と最も高くなっている。最も低かった南部と比較すると11.7%の開きがみられる。χ^2検定の結果，５%水準で有意差が認められた。

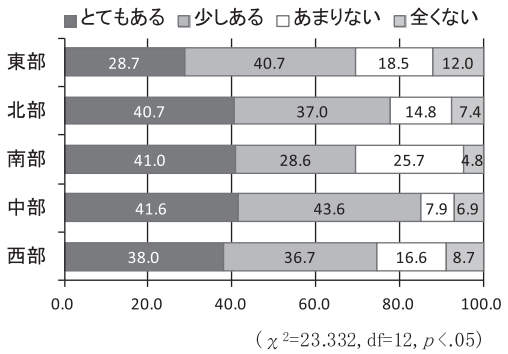

図８．リフレッシュ効果；「友人との電話」の地域比較

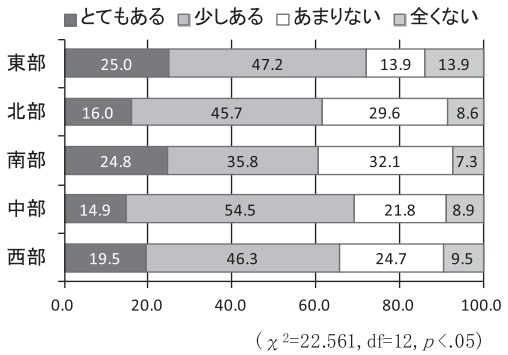

図９．リフレッシュ効果；「雑誌・読書」の地域比較

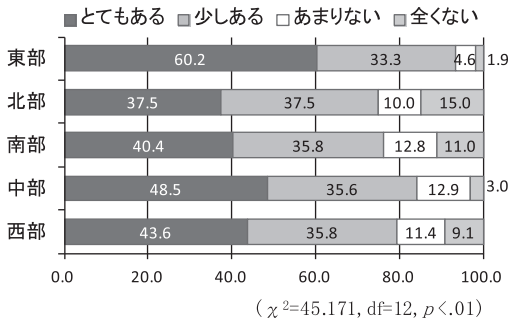

図10．リフレッシュ効果；子育てサークル（子育て支援センター含む）の地域比較

図10は，子育て支援センター含む「子育てサークル」について地域比較したものである。ストレス解消法と同様に，リフレッシュ効果についても東部が最も高く，93.5%の者が効果があると回答している。「とてもある」と回答した者も６割を超えている。一方，最も低かった地域は，北部で75.0%であり，東部とは18.5%もの開きがみられ，χ^2検定の結果，１%水準で有意差が認められた。

図11は，リフレッシュ効果と実際にとっているストレス解消法とのギャップをみたものであり，差が大きいものから順に示している。最も差が大きかったものは，「映画・観劇・コンサートなど」で，半数以上の人がリフレッシュ効果があると回答したが実際にストレス解消法として行っている割合は１割にも満たなかった。次いで，「スポーツ・ジム」「旅行」「友人との電話」「自分の趣味」「美容院」「ペット」と続いている。

「友達等と直接の交流」については，９割の者が

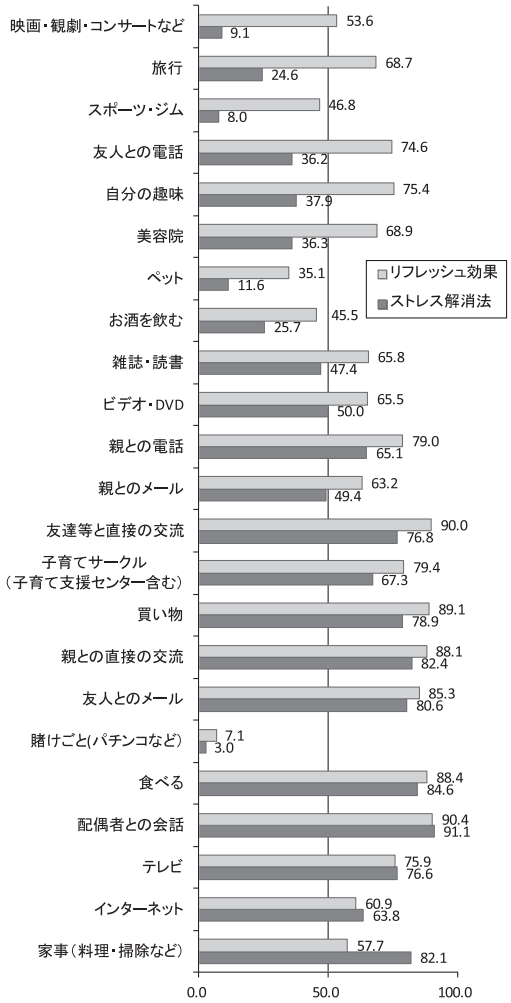

図11．リフレッシュ効果と実際のストレス解消法とのギャップ

リフレッシュ効果があると回答したのに対し，実際ストレス解消法として行っている者は76.8%で，13.2%の開きがある。また，子育て支援センター含む「子育てサークル」についても，約８割の者がリフレッシュ効果があると回答したのに対し，実際ストレス解消法として行っている者は67.3%で，12.1%の開きがみられた。

一方，育児におけるリフレッシュ（気分転換）の効果として考えている以上に，実際に取っているストレス解消法は「家事（料理・掃除など）」で，約４割の者がリフレッシュ効果があまりないと回答しているのに対し，８割を超える者が，家事がストレス解消になっていると回答している。このことは，１日の過ごし方として，子育てだけに関わるよりも，様々な活動にかかわることが気分転換につながることを示しているといえよう。

４．育児サポートのニーズの実態

図12は，育児において今後どのようなサポートが必要かを尋ねた結果で，「とても必要」と「少し必要」を合わせた割合が高かった順に示している。

最もニーズが高かった育児サポートは，親同士が集える「交流の場」で，約９割の者が必要だと回答している。また，子どもを「一時的に預かってくれる場」を必要と回答した者も84.7%と高い。また，この項目については，「とても必要」と回答した者が半数以上を占め，ニーズが高いことが分かった。

また，育児不安が社会問題となっている中で，「子育て相談の充実」を求める人は85.7%，「病気の際の相談」79.8%，「自分自身の健康相談」62.4%，「親へのカウンセリング」59.4%と，子育てに関わらず親自身の相談に対するニーズも高い。

次に，育児サポートに対するニーズに関する12項目について，５つの地域で比較したところ，図13に示す１項目のみにおいて，地域差が認められた。

図13は，「親子教室の充実」の地域比較を示したものであるが，東部が88.8%と最も高くなっている。「とても必要」と回答した割合も６割を超え，東部が最もニーズが高い。全体としても，「親子教室の充実」を望む者は83.0%であり，共に子育て親子が身近な場所で気軽に集まり，親子同士の交流や，子育て講座等のイベントのニーズが高いことが分かった。

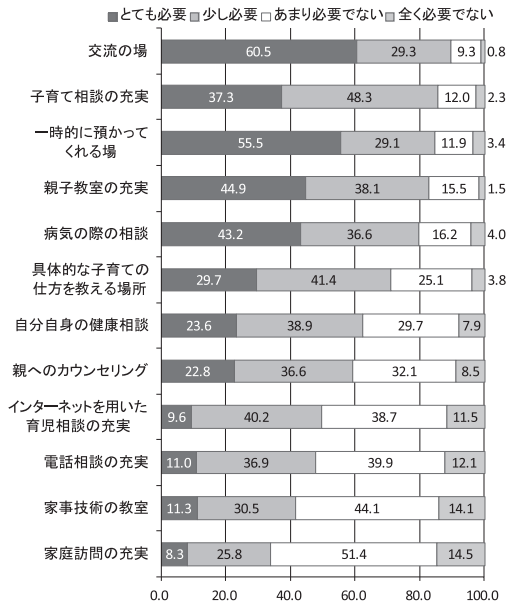

図12.　育児サポートのニーズ

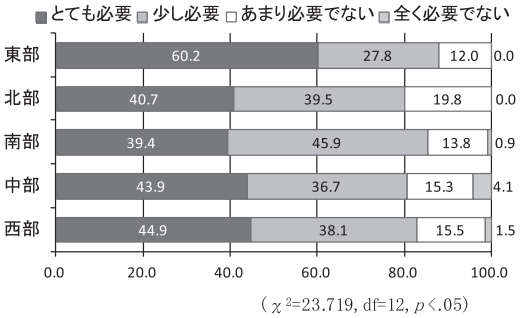

図13.　育児サポートのニーズ；
「親子教室の充実」の地域比較

また，自由記述から，小さな子どもが安心して遊べる施設，公園・広場，親子で楽しめる講座・体操教室などの催しの充実を望んでいる者が多いことが分かった。子どもをつれていると，気を使っている親が多く，誰でも気軽に利用しやすいことがポイントであるようだ。また，ママ友がなかなかできないことを悩んでいる人もあり，自由に参加できる子育

てサークルが必要と感じている人も多い。交流の場があってもグループがすでにできていると入りにくく，対人関係で消極的な親子でも気持ちよく受け入れてくれる場所や，乳児から４歳まで幅広い年齢層を受け入れてくれる子育てサークルを望んでいる人もいた。その他にも，お年寄りと触れ合える場や父親と子どものコミュニケーションの機会を設けて欲しいという意見もあった。預けるのではなく，子どもと遊んでくれる出張子育てがあれば安心できるという意見もあった。

さらに，子育てに関する情報提供を望んでいる人も多い。遊び場や交流の場，地域の病院や病気のことを教えてもらえるところがあると便利であるといった意見や，子どもと一緒に気軽に相談できる場所や悩みを話しやすい相談員，発達障害の子どもが気軽に利用できる施設やサポート体制を望む声があった。

自由記述から分かったことは，子育て中の親が求めるサポートは多岐にわたっているということである。また，隣の市町村にはある支援が自分たちが住んでいる地域にはないので，整備してほしいという意見もあった。例えば，田舎に住んでいる人ほど，土日も含めて毎日利用できる室内の遊び場や買い物時の子どもの一時預かりを求める声があり，地域差がみられた。このことは，地域によって必要とされる子育て支援ニーズが異なっていることを示しており，地域特性を踏まえた子育て支援を考えていくことの必要性を示している。

Ⅳ．まとめと今後の展望

本研究では，本学が地域の拠点として，新たな子育て支援活動を展開していくために，まず，県内の子育て中の親やその家族の潜在的な子育て支援ニーズを把握することを目的とした。その結果，次のような主な知見を得た。

１）親が抱えている子育ての悩みは，子どもの健康や発達，障害に関わることが多いが，子どもとの接し方や，夫や祖父母など家族関係に関わる問題など多岐にわたっており，多角的・総合的な子育ての相談が求められている。

２）子育てのストレス対処法としては，配偶者や親，友人とのかかわりの中でストレスを解消している人が多いが，友人とのかかわり方については地域差がみられる。

３）育児サポートのニーズとしては，親や子ども同士が気楽に集える交流の場や，様々な子育て相談に対応しているシステム作りを望む声が多い。

以上のことから，本学の地域社会への貢献として，親子で自由に遊んだり他の親子と交流できる場や，子育てに関する不安や悩みのご相談に総合的に受け付ける体制づくりを本学に整備していくことは，意味のある取り組みになると考えられる。

また，子育て講座等のイベントなど，子育てに関する情報提供も必要であり，このツールとしてはSNSを利用していくことが有効であると考えている。さらに，大学から離れた地域の子育て支援についても，子育て相談等で，SNSは活用できるものと考えている。

本研究の調査対象者は，地域の子育て支援センターを利用している無職や育児休業中の母親が大多数であり，すべての子育て中の親や家族の子育てニーズを反映したものではないと言える。今後は，職業を持つ親、子どもの年齢別にみた子育てニーズの違いを探るとともに，保育士や保健師，助産師のインタビュー調査を通じて，さらに県内の潜在的な子育て支援ニーズを把握した上で，具体的な子育て支援活動を計画・実践し，それらの活動がどのような効果があるかを検証していく計画である。

そして，それらの実践活動には，大学の教員だけでなく，地域の子育て支援センターの保育士や幼稚園教諭にも参加してもらい，また，親準備期の高校生や本学学生，地域住民を取り込むことで，大学としての地域貢献につながっていくと考えている。

Ⅴ．文　献

1）井上明子・石原留美・松村惠子，2011.　助産師の視点から見た児童虐待の背景，香川県立保健医療大学雑誌，2, 93－99.

2）加藤孝士，2012.　母親の主観的幸福感とソーシャル・サポートの関係―サポートネットワーク，及び関わる人数に着目して―, 日本小児保健研究, 71（３）, 450－454.

3）木脇奈智子，2012.　多様化する「子育て支援」の現状と課題：新たなニーズとそれに対応する事例から，藤女子大学 QOL 研究所紀要，7（１），37－43.

4）近藤真理子，2012.　地域の子育て支援のニーズの変化と今後の課題：支援の充実とその内容についての一考察，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，22, 157－166.

5）森田美佐，2011.　「子育て支援」はもう十分か？－2000年代からの日本の子育て支援策の成果と課題，高知大学教育学部研究報告，71, 187－196.

6）野口純子・小川佳代・松村惠子，2005.　乳幼児を育てている母親の悩みと育児ストレス－保育所児と幼稚園児の比較－，香川県立保健医療大学紀要，2, 79－86.

7）小川佳代・榮玲子・野口純子・三浦浩美・竹内美由紀・舟越和代・宮本政子・大池明枝，2010.　地域子育て支援事業の効果に関する研究－母親の親性の発達に影響する要因－，日本小児保健研究，69（３），432－437.

8）小川佳代・野口純子・竹内美由紀・榮玲子・舟越和代・三浦浩美・植村裕子・大池明枝・松村惠子・宮本政子，2006.　地域子育て支援研究会の活動，香川県立保健医療大学紀要，3, 207－213.

9）齋藤啓子・三木章代・中澤京子・小川佳代・寺尾紀子，2011.　離乳期の子どもの母親の乳離れに関する不安と関連要因，四国大学紀要自然科学編，31, 35－40.

10）正保正恵，2005.　福山市における子どもに関する相談事業の研究（４）：ふくやま子育て応援センターにおける相談事例のカテゴリー化にみる潜在的子育て支援ニーズ，福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報，5, 37－46.

本研究は，「平成24年度四国大学プロジェクト方式による学際的・総合研究」の助成を受けて実施された。また，調査の実施にあたっては，地域子育て支援センターのご協力を得た。本調査にご協力頂きました多くの方に心より感謝申し上げます。

抄　　録

本研究の目的は，A 県における子育てニーズを明らかにすることである。この目的を達成するために，477名の子育て中の親と家族のデータを集めた。主な知見は次のとおりである。

1）親が抱えている子育ての悩みは，子どもの健康や発達に関わることが多い。

2）子育てのストレスを，配偶者や親，友人とのかかわりの中で解消している親が多いが，友人とのかかわり方については地域差がみられる。

3）子育て支援のニーズとして，親や子ども同士が気楽に集える交流の場を望む声が多い。

キーワード：子育て支援，子育ての悩み，ストレス解消